

- 聖書箇所 ルカの福音書 1章 46～56節
- 説教題 主のあわれみに生かされて

力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。
その御名は聖なるもの、主のあわれみは、代々にわたって
主を恐れる者に及びます。(49～50節)

序 マリアの賛歌

「マリアの賛歌(マニフィカート)」と呼ばれ、慣れ親しまれている今日の箇所に聴きましょう。この賛歌は、処女であったマリアが聖霊によって救い主をみごもり、救い主を生むこととなる。という御使いガブリエルを通しての受胎告知を受けた後、同じようにバプテスマのヨハネを身ごもっているエリサベツを訪問した際の、マリアの【賛美・告白】です。エリサベツは自分に会いにやって来たマリアのあいさつを聞いたとき、聖霊に満たされて叫びました。「あなたは女の中で最も祝福された方。…(中略)…主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」この叫びを受けて、マリアもまた主をたたえ【賛美・告白】をしました。

1. 正しく驚いた人 戸惑いく神のことば

それにしても受胎告知を受け、主の母となる(42節)という召しは、ひとりの女性にとってどれほど重大な使命でしょうか。ガリラヤ地方の小さな村ナザレで生まれ育ち、今はヨセフと婚約中。これから始まってゆく結婚生活への期待や不安といった、マリア自身の「今」から想像する将来とはかけ離れ、全く予想だにしないことでした。同時に、マリアはひとりの信仰者として「主の 때가満ちて、イスラエルに約束の救い主が来られる。」と信じ、待ち望んでいたことが、マリアの賛歌全編から伺えますが、まさか自分がその救い主の誕生に、しかも母となるという形で関わることになるなどは、夢にも思わなかったでしょう。実際、ガブリエルによって届けられた告知の際には大いに戸惑いました(1:29, 1:34)。

しかし、マリアは戸惑いの中でも、神のご計画に対して不信に陥ったり、「主の母への召し」を断ったりすることはありませんでした。「あなたのおことばどおり、この身になりますように」(1:38)と応えたのです。戸惑い、恐れ、何故私?…マリアの心にも浮かんだはずですが、しかしそれよりも「主によって語られたことは必ず実現する」(1:45・エリサベツによる)。主と、主のことばの真実さの方が、マリアにとって確かな真理でした。

マリアの態度から教えられます。私たちもまた(さすがにマリアのような驚異的な召しでないにしても)、主のご支配とご計画の中に組み込まれています。私たちの生活において、それに光が当てられる経験が必ずあります。そのとき、私たちは戸惑い、緊張、自分にできと思えない—など、葛藤の中で尻込みしてしまうかもしれません。大いに戸惑い、祈りましょう。しかし、私たちの最終的な応答は「主によって語られたことは必ず実現すると信じる」。この告白でありたい。そう願います。

2. 賛歌の中心 主のあわれみ

告知を受けてからというもの、マリアは自分が「主のはしため」である、という認識をいっそう強めています(1:38, 1:48)。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である主をほめたたえます。この卑しいはしために目を留めてくださったからです。」(1:47-48)。マリアは使命へと召されたのち、より深く自分の卑しさ(身分や地位の低さ、貧しさ、とるにたりない者であること。【社会的にも、霊的にも】)を痛感してゆきました。一方で、自分を主のはしためとして、壮大な神のご計画のままに選び、用いてくださることの不思議についても、深く教えられてゆきました。

イスラエルの救い・すべての人の救いという、壮大な救いのご計画にマリアを組み込んでくださる意味を、祈りながら噛みしめていったのでしょうか。「救い主の母として、他のあらゆる女性を選んで立てる可能性があったにもかかわらず、主は卑しい自分に声をかけてくださった。そこに、どんな意味があるのか。」思慮深いマリアらしく、祈り、思いを巡らせたことでしょうか(1:29「考え込んだ」、2:19「思いを巡らしていた」)。

マリアが見出した、選びの意味の答え。賛歌の主題は「主のあわれみ」であるといえます。他のもっと立派な、すぐれた女性ではなく、卑しい自分を、はしためとして目を留め、救い主の母とされた。それは、主を恐れる者(50)、低い者(2:52)、飢えた者(2:53)たちすべてに対して、主は目を留めていてくださり、主のあわれみは彼らに、及ぶのだということの何よりの証拠である。と、救い主の母として選ばれたその体験から、深く教えられていったのです。主の母への召しは、マリアを主のあわれみについてのより深い理解・より深い感動へと導きました。個人的な葛藤を経て、越えて、神の民全体に及ぶあわれみがどんなに大きいかへ目を向ける、視野を広げていただきました。新改訳2017では、1:50と1:54の「あわれみ」は、「真実な愛」とも訳せる語であることに気づくようにと促しています。

マリヤのように、「卑しい」「はしため」という両側面から、私たちを用いてくださる主の召しに従い続けてゆきたい、そう願います。このことは、単なる卑下や、逆に高慢になることを不可能とさせ、自分の身のふりようだけに終始注目してしまうことをやめさせます。

主はあわれみ(真実な愛)を忘れないお方です(1:54-55)。そして、その大きなあわれみ(真実な愛)によって、私たちにイエス様を与えてくださいました。私たちが罪から救い、さらに召し出して、すべての人の救いのために用いてくださいます。

どこで・どのように用いられるにしても、主に救っていただいた私たちひとりひとりもまた、ご計画の中に組み込まれています。主のご計画・自分への召しは何だろうか。そのことを改めて考えてみましょう。主のあわれみ(真実な愛)の大きさに、改めて感動させていただきつつ、私たちもまた主に【賛美・告白】をささげてゆきましょう。

主はあわれみを忘れずに、
そのしもべイスラエルを助けてくださいました。
私たちの父祖たちに語られたとおり、
アブラハムとその子孫に対するあわれみを
いつまでも忘れずに。
(54～55 節)